

## 今週のメニュー

## ■トピックス

## ◇三宅島の暴露実験場開設

ー火山性腐食ガス環境下での各種建築材料の劣化試験が始まるー

## ■随想

## ◇古代ヤマトの遠景（67）ー【継体王家の誕生（3）】ー

信越化学工業（株） 木下 清隆

## ■編集後記

## ■トピックス

## ◇三宅島の暴露実験場開設

ー火山性腐食ガス環境下での各種建築材料の劣化試験が始まるー

8月20日に、1年ぶりに三宅島を訪問しました。伊豆七島を巡り、建物の劣化を観察して歩いたときから4年が経ちます。伊豆大島では、個人の住宅に塩ビサイディングを使ったリフォームが行われ、定期的に外観の状況や内部の金属の腐食の程度などを観察しています。築100年を超える住宅ですが、見栄えも良く気に入って頂いています。

その足で、更に南の三宅島を訪れたのが3年前です。初めての訪問で印象に残ったのは何度となく襲われている火山活動の被害にも拘わらず、たくましく生活をされている島民の方々の絆の強さでした。一方で、島内を視て回ったところ、1983年の噴火で溶岩流に飲み込まれた夕景浜を眺める阿古地区の小中学校の廃墟跡、2000年の噴火で火砕流と大量の火山ガス（二酸化イオウ）で被害を受けた三宅牧場や坪田地区の建物跡などで、トタン屋根や外壁の止め具に使っている金属の腐食、塗料の劣化などが見られました。未だに、火山ガスが放出され、全島避難から戻ってからも厳しい環境での生活をされています。



これまで、塩ビサイディングによるコンクリート躯体の塩害保護効果を調べる研究を日本大学湯浅教授、琉球大学山田教授と進めています。その暴露実験場として、沖縄県本島北端の辺野喜、北海道積丹半島の泊、日本大学の習志野キャンパスの3ヶ所が選ばれ、既に3年目のサンプリングを終えて、現在、その効果を解析中です。また、温泉地の腐食ガス環境下での同様の実験も、九州大学小山准教授を中心に霧島温泉の暴露場で進めています。



暴露試験体(コンクリートサンプル)  
(背景の雄山からは火山ガスも噴出している)

これらの共同研究で縁のある材料を専門とされる先生方をお連れして、三宅島を案内したところ、火山性ガスによる腐食に興味を持たれ、暴露実験場を三宅村から借りて実験をしたいとの希望があり、2年目に平野前村長に直接お願いし、前向きなご理解を得ていました。

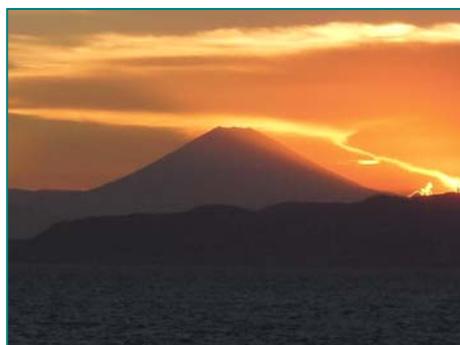
今回、湯浅先生が実験計画の提出と使用許可の申請を行い、正式に承認を得て、火山ガス暴露実験がスタートしました。塩ビ建材は含まれていませんが、暴露場近くの三宅牧場の建物に使われている塩ビ管や雨どいは立派に残り、火山性腐食ガスへの耐久性の強さが示されています。



暴露試験体

当日、湯浅先生と学生ふたり、小山先生、東海大学の伊藤専任准教授、材料メーカーの方が集まり、安全を確保しながら、暴露場の設立には資材の持ち込みと組み立て、試験コンクリートサンプルなどの初期値測定が行われ、無事に日本大学借用の暴露実験場が開設されました。

帰りの船便で東京港へ向かう途中、夕日に映える富士山がくっきりと見え、やがて、三日月が徐々に輝きを強めていく中で、関係された先生方の研究の成功を祈念させて頂きました。



## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景（67）－【継体王家の誕生（3）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

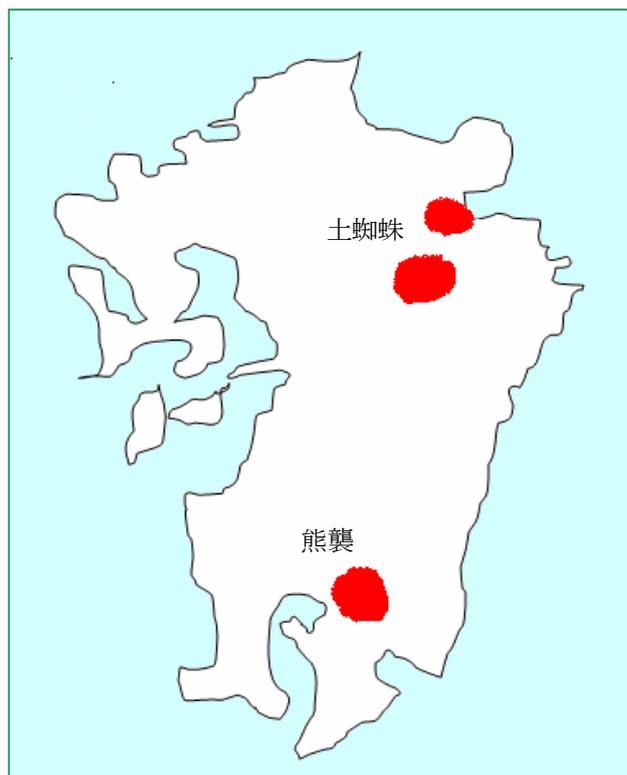
継体天皇の西国・九州制圧に関する記述は記紀のどこを探しても見当たらない。ところが、その記録が特定の天皇の中に埋め込まれていると想定すると、それに該当するものが浮かび上がってくる。それは景行天皇の九州制圧譚である。そこで、この景行天皇紀の記録を紹介することにするが、内容はかなり詳細なものなので、その概要のみを紹介する。

○十二年、八月、熊襲がそむいたので、天皇は征伐のために筑紫へ向かった。途中、周防（山口県）で「皇命に従わない賊」を滅ぼした。その後、豊前（福岡県）に着き行宮を立て、そこを「京」と名付けた（現在、福岡県<sup>みやこぐん</sup>京都郡の名がのこる）。十月、<sup>おおきた</sup>碩田国（大分県）に到着。そこで、その地（現在の別府地域）と竹田地域（別府の南方、阿蘇山の東方）に土蜘蛛（皇命に従わない賊）が居ることを知らされた。天皇は群臣と策を練ってこれを滅ぼした。十一月、日向国に着き、行宮を立て「高屋宮」と名付けた。十二月、熊襲を討つことを相談し、群卿に詔して「熊襲討伐に軍勢を出して協力するよう」要請した。

○十三年、五月、熊襲を平定。その後六年間、高屋宮に留まった。

○十七年、三月、子湯県（宮崎県児湯郡）に到る。

○十八年、三月、夷守(宮崎県小林付近?)  
に到る。四月、熊県(熊本県球磨郡)、  
に到る。更に船で葦北へ渡る。五月、  
葦北から火国の八代県豊村に到る。沖  
から見た火を目指して豊村の浜に  
着くことができたが、人の燃やす火で  
はないことを知り、その国を「火国」  
と名付けた。六月、阿蘇国に到る。七  
月、筑紫国三毛(福岡県三池)に到る。  
更に八女県(福岡県八女郡)に到る。  
八月、<sup>いくはのむら</sup>的邑(福岡県浮羽郡)に到る。  
○十九年、九月、大和に帰還。



景行(継体)天皇が制圧した土蜘蛛と熊襲

以上のように景行天皇の西国・九州制圧の遠征は十二年八月から十九年九月までの七年間にも及んだ。この遠征のハイライトは熊襲征伐であるが、どのような戦いをしたのか、記述からは全く分からない。記録では数ヶ月で平定したことになっているが、この後、その地に理由もなく六年間も滞在するのは、如何にも不自然である。本当のところは六年間、戦いが続いたと考えるのが順当であろう。この景行天皇制圧譚の中にきわめて注目すべき文がある。それは熊襲との戦いに備えて「諸国へ出兵の要請をした」といった内容の文である。これまで、倭国連合軍は諸国の兵によって構成され、これを倭王が率いて戦ったと説明してきたが、その具体的な要請文がここに出ており、倭国連合軍の実態が明確にされているという意味で重要な文である。

この遠征で天皇自身は七年間も都を留守にしたことになる。ところがこの景行天皇の事跡は即ち、継体天皇の事跡であるとしているここでの立場からすれば、残りの十三年間はどうなっているのかという問題が出てくる。それは、先述したような継体天皇誕生の経緯からして、主として吉備との戦いに費やされた、と考えることが出来よう。継体天皇の軍は、前回紹介したような琵琶湖周辺・尾張及びその他豪族達が参加した連合軍になっており、この形で戦いは継続されたと想定される。そして、長い戦いの末、継体軍はこの吉備戦に勝利した。しかし、継体天皇の役目はこれで終わった訳ではない。本来の目的である日向の熊襲征伐が控えている。彼は新しい目標に向かって西進することになるが、これに従うのは近衛兵ともいべき一部の軍勢に限られていたと考えられる。それは、吉備戦に参加していた諸豪族の兵の殆どが国許へ引き上げたからである。とにかく長い戦いだったことから、皆、疲れ果てていた事もあるが、当時の戦いにおける戦力は現地調達主義だった点が大きいいえよう。吉備との戦いが終わると彼らの役目も、そこで終わったと言うことである。僅かな手勢を引き連れて継体天皇の西国・九州制圧の行軍はスタートする。このときから、その主人公の名が、景行天皇に変わる。

ところで、この吉備との戦いの経緯については書紀には何も記録されていない。何故かの問題が出てくるが、それは継体天皇以降の諸天皇に、吉備を中心とした西国豪族の後裔たちが仕えた、といった経緯があったからだと思定される。彼らにしてみれば賊軍の汚名を着せられて、記録されるのは耐え難かったからである。恐らく彼らは自分達が仕える権力者を動かし、記述抹消に成功したものと考えられる。

景行天皇は、周防の賊と戦ったときは、恐らく手勢の兵で間に合うとみて、近郷の軍勢の参加要請はしなかったと考えられるが、九州に入って以降は、大々的な召集状を各地の豪族達に送ったと考えられる。それに応じて参加したのが、豊前・日田・八女地方の豪族だったと想定される。理由は、これらの地方の前方後円墳が六世紀に入って急に大きなものが造られるようになったからである。前方後円墳の大きさは倭王家との関わりを深さを反映していると考えられていることから、彼らが景行天皇即ち継体天皇の呼びかけに応じたと考えることは出来よう。この中の八女地方の豪族こそ、筑紫国造磐井として知られる人物である。磐井の墓として知られる岩戸山古墳は六世紀前葉に八女地方に築造された前方後円墳で、墳長は一三五mもあり、当時の九州地方では最大の墳墓である。この磐井及び豊前・日田の豪族達は、別府地方と竹田地方の土蜘蛛退治に大いに貢献したものと考えられる。磐井は筑紫国造として書紀に登場するが、磐井の先祖に特に有力者がいたとの記録はなく、何故、彼が国造となったのかは謎といえる。ところが、この豊後での戦いにおける功績が認められてのことと考えれば、彼の国造就任も一応、説明可能となってくる。

この磐井はこの後、新羅と通じ倭国軍の任那派兵を阻止したというかど廉により、物部あらかい鹿鹿火に討たれる。「磐井の乱」として知られるこの戦いは、色々これまでで解釈されてきているが、本当のところについては未だ説明されているとはいえないようだ。驚くべき史実が隠されているというのが、ここでの見解であるが、この問題の解明は項を改めることにしたい。

豊後地方での戦いの後、いよいよ熊襲との戦いになるが、彼らの拠点は曾そ於おの地とされており、現在の都城から国分にかけての一带と考えられる。皇軍の拠点は「高屋宮」と書紀に出ているがその場所は、現在の鹿児島空港付近と想定されている。曾於に隣接するような場所である。天皇は改めて諸国に対し協力を呼びかけるが、これに応じたのは、日向地方、肥後南部地方の豪族達だったと見られる。この戦いにおいては兵力・兵站問題が厳しかったと見られ、六年の長きに亘った。最終的に継体軍は勝ったのか、和解したのかどうかは分からない。しかし、継体天皇の後の欽明天皇時代になって、

○欽明元年(五四〇)三月、隼人が一族の者を率いて帰順してきた。

との記述があることから、熊襲と直接戦ったときは決着が付かず、和解した可能性が高い。その後、彼らなりの判断でヤマト王家に服属することを決めたということであろう。この欽明天皇条では「熊襲」ではなく「隼人」の名になっているが、これは彼らがヤマト王家に服属するようになって以降、隼人と呼ばれるようになったと考えられ、そのことを反映してのことと想定される。服属してきた時は熊襲だったが、書紀が編纂された時代には、すっかり隼人の名で親しまれていたということである。

以上、簡略な説明ではあったが、吉備制圧と景行天皇の西国・九州制圧譚とを結びつけると、継体天皇の大和入り二十年遅れの問題は、ある程度、解決の目処がついたといえよう。ここに継体王家は名実共に誕生した。

(つづく)

#### 【お詫びと訂正】

前々回の [\[古代ヤマトの遠景 \(65\)\]](#) において、“三国は神通川河口の町で” とあるのは、“三国は九頭竜川の河口の町で” の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

前回：[「古代ヤマトの遠景」\(66\) - 【継体王家の誕生 \(2\)】 -](#)  
「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

### ■ 編集後記

今週から子供たちは新学期、長かった夏休みもやっと終わりました。ほっとしている方も多いと思います。

埼玉県は海がないこともあるのか、県営の大きなプールが4つあります。

東京都内の民間のプールの大人一人分の料金で家族4人が遊ぶことが出来る入場料の安さもあって、県外からの来場者が多いです。一番大きな東京から最も近い「しらこぼと水上公園」は土日となると一日数万人もの人が来て、付近はすごい混雑で車も置けません。

私は混んでいて近づけないので夏休みの最終日に埼玉県中部の加須市にある「はなさき水上公園」に行ってきました。人気の波の出るさざなみプールで横になりながら夏の疲れをとってきました。(リマル)

### ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)